

令和7（2025）年度 12月「歳時記」

12月は「師走」とも呼ばれ、年の瀬の慌ただしさとともに、さまざまな風物詩が日本の暮らしを彩ります。街は華やかなイルミネーションに包まれ、クリスマスや忘年会といった行事が季節の移ろいを感じさせます。

「大掃除」もまた、年末の重要な行事の一つです。古くは「煤払い」と呼ばれ、神仏を迎えるための宗教的な意味合いがありました。現代でも、家中を丁寧に掃除し、心身を整えて新年を迎える準備をする風習として根付いています。

こうした風物詩の数々は、忙しさの中にも日本人の美意識や感謝の心を映し出し、年の終わりにふさわしい静かな感動をもたらしてくれます。

今月は、年の暮れに慌ただしく旅支度を整えていく自らの姿を著している「おくのほそ道」の冒頭を取り上げました。中学校2年生の学習内容です。

<古文>

月日は百代の過客にして、行きかゝ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへて、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢をはらひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に、白河の関越えむと、そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず、股引の破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆるより、松島の月まづ心にかかりて、住めるかたは人に譲りて、杉風の別荘に移るに、
草の戸も住み替はる代ぞ雛の家
面八句を庵の柱に懸け置く。

<口語（現代語訳）>

月日は永遠に旅を続ける旅人のようなものであり、過ぎ去っては新しくやって来る年もまた旅人に似ている。一生を舟の上で暮らす船頭や、馬のくつわを

と ろうねん むか ま ご まいにちまいにち たび たび じぶん
取って老年を迎える馬子などは、毎日毎日が旅であって、旅そのものを自分のす
みかとしている。(ふうが みち しょうかい むかし ひとびと なか たび とちゅう
で死んだ人が多い。私 もいつの頃からか、ちぎれ雲のように風に誘われて、あ
てのない旅に出たい気持ちが動いてやまず、(近年はあちこちの) 海岸をさすら
い歩き、去年の秋、隅田川のほとりのあばらやに(帰り)、蜘蛛の古巣を払って
(住んでいるうちに)、しだいに年も暮れ、新 春ともなると、霞の立ちこめる
空の下で白河の関を越えたいものだと、そぞろ神が乗り移ってただもうそわそ
わとさせられ、道祖神が招いているようで、何も手につかないほどに落ち着かず、
ももひき やぶ つくろ どうちゅうがさ つ か さんり きゅう す
股引の破れたところを 繕い、道 中笠のひもを付け替え、三里に 灸 を据える(な
ど旅の支度にかかる) ともう、松島の月(の 美 しさはと、そんなこと) がまず
き になって、いま す いおり にん ゆす さんぶう べっそう うつ
気になって、今まで住んでいた 庵 は人に譲り、杉風の別荘に移ったのだが、
もと そうあん あたら じゅうにん こ わたし す ころ
元の草庵にも、新 しい住 人が越してきて、私 の住んでいた頃のわびしさと
はうって変わり、華やかに雛 人形を飾っている。
おもてはつく かとで きねん いおり はしら か
面 八句を、(門出の記念に) 庵 の 柱 に掛けておいた。

え ど じだい か
江戸時代に書かれた「おくのほそ道」は、日本を代 表する紀行文です。1689
ねん がつ はし にち こ だいいこう たいけん けんぶん しる さくしゃ
年3月から始まった、150日を超える大旅行の体験や見聞を記しています。作者
のまつおばしゅう え ど じだい ぜんき はいじん たか げいじゅつせい しょうふうはいかい そうし
の松尾芭蕉は、江戸時代前期の俳人で、高い芸 術 性をもった蕉 風俳諧を創始し
ました。

ところで、「俳諧」「俳句」といえば、加計の「百句苑」が思い浮かびます。「吉水
えん ちか ひゃくえん はいく よ ていえん せいび か け いにしえびと よ
園」近くの「百句苑」は俳句を読む庭園として整備され、加計の 古 人が詠んだ
く せきひ きざ じもとか けしょうがっこう はいく そうさくかつどう さか
句が石碑に刻まれています。また、地元加計小 学 校では、俳句の創作活動が盛
んで、交 流ホールに「加計 小 百句苑」を設置して、日々の生活や自然の移ろい
を題材にこどもたちが詠んだ句を展示しています。さらに、今年の五サー市では、
らいじょうしゃ はいく よ く あつ きかく しゅうねんはいく
来 場 者に俳句を詠んでもらい 150句を集めるという企画「150周 年俳句チャ
レンジ」を見事に成功させてくれました。

きょういくいいんかい でんとう たし あ き おおたちょう はいく
教 育委員会としてもこの伝統をより確かなものにし、安芸太田町を「俳句」
の町として発展させていきたいと 考 えています。皆さんのご理解とご協 力 を
ねが
お願いします。

それでは練習問題です。皆さんぜひチャレンジしてみてください。

れんしゅうもんだい
＊練習問題

- 1 作者の人生観を最もはっきり示している一文を古文中から抜き出し、初めの五字を書きましょう。
- 2 波下線部「日々旅にして旅をすみか」とありますが、このように暮らしているのはどのような職業の人だと述べていますか。現代語訳中から見つけて二つ書きましょう。
- 3 旅に出たいと誘われる気持ちを対句を用いて表現している部分を古文中から抜き出し、初めと終わりの三字を書きましょう。
- 4 波下線部「草の戸も住み替はる代ぞ雛の家」について、この俳句の季語・季節・切れ字を書きましょう。

かいとうれい
＜解答例＞

- 1 月日は百代 2 船頭・馬子 3 そぞろ～つかず
- 4 雛・春・ぞ

あ き おおたちょうきょういくいいんかい きょういくちょう おおの まさと
安芸太田町教育委員会 教育長 大野 正人